

語形から機能を知る

—ので、のに、だけで、だけに、の分析を通して⁽¹⁾—

三 枝 令 子

1. はじめに

「ので」「だけに」、「のに」「だけで」には、次のように似た表現がある。

- (1) 外国へ旅行するので、まとまった金が必要だ。
- (2) 外国へ旅行するだけに、まとまった金が必要だ。
- (3) ちょっと旅行するのに、そんなに金が必要か。
- (4) ちょっと旅行するだけで、そんなに金が必要か。

「ので」「のに」、「だけで」「だけに」も相互に意味的に近い表現がある。

- (5) 旅をするので、まとまった金が必要だ。
- (6) 旅をするのに、まとまった金が必要だ。
- (7) ちょっと旅行するだけで、そんなに金を使うのか。
- (8) ちょっと旅行するだけに、そんなに金を使うのか。

日本語教育では語の意味は用法を通して説明することが多い。それは、一見わかりやすいようだが、用法の記述は分類を細かくすることになりがちで、かえって語の本質を理解する妨げになることもあるだろう。ここでは、主に「ので」「のに」「だけで」「だけに」を通して、語の形からそれぞれの語の意味と機能を考えることにする。この四語を取り上げるのは、形に共通するところがあり、また実際、上にあげたように意味的にも共通しているためである。ある一つの言葉の意味が、同義の語の意味の異同によって明確になるように、これらの語の意味も、よく似た語との比較によって明らかになる部分があると思われる。「ので」「のに」は、従来、それぞれ既定の順接条件、

逆接条件の意味を持つとされている⁽²⁾。また、「だけに」にも因果関係を示す役割があるとして、他の理由表現とどう異なるかという視点で取り上げられることが多い⁽³⁾。しかし、ここでは、上のような用例の存在から、これら四語が単語として別々の機能を持っていると考えるのではなく、「の」「だけ」「で」「に」という語の組み合わせから全体の意味が成立していると考えられる。こう捕らえることによって、この四語それぞれの意味と機能について、より体系的で妥当性のある解釈が可能になると思われる⁽⁴⁾。

2. 「ので」と「だけで」の語構成

理由の「ので」を品詞的にどう見るかについては、様々な見解がある。たとえば、(1) 準体助詞の「の」に格助詞の「で」が接続したと考えるもの（たとえば、永野(1951)）、(2) すでに接続助詞として一語と取るもの（たとえば、三尾(1942)、日野(1963)、寺村(1981)）、(3) 名詞化辞の「の」に「だ」の連用形が付いたと考える立場（松下(1930)、日下部(1968)、氏家(1969)）、(4) 「のだ」の中止形とするもの（三上(1953)）などである。筆者は、理由の「ので」を接続助詞とすることについて、それを否定するものではない。「ので」が接続助詞化しているという原口(1971)や吉井(1977)の通時的な考察もある。しかし、語構成の面からは、「ので」は「の」と「で」の二語からなると考える。そして、「ので」の「の」は格助詞の「私の本」の「の」とは異なるが、いわゆる準体助詞から「のだ」の「の」までの用法の広さを持ち、また、「ので」の「で」は助詞ではなく、「だ」の連用形の性格が強いとみる。すなわち、上の(3)の立場に近い。ただ、松下(1930)とは「ので」に「のだ」の活用形としての側面も含まれると考える点で異なり、また、氏家(1969)とは準体助詞的な機能も「ので」の「の」に認める点で異なる。上の(2)と(4)の「ので」を一語とみる解釈については次のように考える。

まず、(2)の接続助詞と見る立場については、三尾(1942)と日野(1963)を取り上げる。三尾は、「あなたが言ったから行ったので、行きたくて行ったわけではない。」のような文の「ので」は、①「から」に近い意味はないこと、②「のでして」と丁寧な表現になりえる、すなわち、形態そのものが文体性を持っているとして別立てにし、理由の「ので」は接続助詞とする。すなわち、三尾の主張は、「ので」の語構成を問題にしているというより、上の(2)と(4)とは異なるものだというところにある。しかし、筆者は、(2)と(4)の用法は、もともとと同じ語形が文脈によって分かれたものとみる。一方、日野は、「ので」が二語ではなく一語からなる根拠として、「あまり暑

いので行かなかった。」という文において「あまり」は「ので」にかかっている。「あまり暑いので」と見ることはできないと主張している。しかし、「あまり暑いのは苦手だ」という表現もあるから、「あまり+形容詞+の」という語構成は可能と考える。

(4)を主張する三上は、終止形に続くものだけを接続助詞とするので、連体形に続く「ので」「のに」は準詞「のだ」の連用形とみる。その理由として、三上は、①「ので」も「のに」も軟式（三上の用語で連体法に収まること）であること。②ガノ可変を失っている「の」は「のだ」「ので」「のに」の三つだけであること、を挙げている。この指摘は、「から」と「ので」「のに」との陳述性の違いを厳密に定めたという点で大変重要なものである。ただ、この二つの条件を「ので」「のに」が満たしているのは事実だが、この条件を満たすものは「ので」「のに」に限らない。たとえば、「だけで」も次のように連体法に収まる。

雨が降るから（遠足をやめた連中）が……

（雨が降るので遠足をやめた連中）が……

（雨が降っただけで遠足をやめた連中）が……

また、ガノ可変も、「ので」「のに」に限らず、述部全体を受ける「の」でも起こらない。次は「のが」の例である。

(9) どれがいいか。

— 君 {が/の} 持っているのがいい。

(10) 鍵をどこに保管しようか。

— 君 {が/*の} 持っているのがいい。

こうした性格を持つ「のが」「ので」「のに」以外にもあるということは、「で」と「に」が問題なのではなく、むしろ「の」で受けている部分がガノ可変に影響していると考えられる。一方で、このことは、「ので」「のだ」が二語からなるという傍証にもなる。「君が持っているのが安心だ」と「君が持っているので安心だ」という二文は、「が」と「で」が違うだけである。語形の共通性を考慮せず、機能の面からみて後者のみ接続助詞とするのは、語構成を考える上からはどんなものだろうか。

「だけで」が「だけ」と「で」の二語からなると考えることについては、「だけ」の方が「の」より名詞性が強く感じられるので異論が少ないだろう。こうして「ので」と「だけで」が二語からなるとなれば、この二語は「で」という共通の語の意味と機能を共有していることになる。そこで、次に、「で」の意味と機能について考えてみ

る。

3. 「で」の意味と機能

山田(1922)は、格助詞の範囲を広く取って、「顔は人で、心は鬼だ。」のように普通活用形の連用形とされるものまでを含めた。一方、松下は「で」を助詞に含めず、助動辞、いわゆる助動詞に含めている。「小刀で鉛筆を削る」は「小刀をもって」の意味に取れるし、「火事で家が焼ける」は「原因が火事であって」と置き換えられ、この「で」には確かに叙述性があると認められる。さらに松下は、「東京で学問する」の場合も、「東京において」と解してはならず、「場所が東京であって、そうして学問する。」と、場所の観念を主体とした叙述と考える。時枝(1950)は、「庭で遊んでいる」の「で」は格助詞とするが、「耳で聞く」については、指定の助動詞とも考えられるとして、結論は述べていない⁽⁵⁾。「台風で家が壊れた」という文で、この「で」を道具格の「で」か、「だ」の連用形の「で」も、もとは同根とみることもできる。形が同じで、しかも意味も同じならあえて分ける必要はないだろう。助詞と助動詞を分けるものは、助詞が格関係を示すところにあるとするなら、構文によって、「で」が助詞的性格を示すときと、助動詞的性格を示すときとがあるとみることが可能だ。理由を表す「ので」のように、名詞成分に「で」が接続し、しかもそれが、主文の述語の格成分にはなりえないときには助動詞的性格が強いと言えよう。

4. 「に」の意味と機能

「に」の用いられ方は幅が広いので、文脈によって以下の右にあげたような意味によって分類されることがある。

遊び <u>に</u> 行く。	↑	目的
先生 <u>に</u> なる。		目的の人、場所
京都 <u>に</u> 行く。		
君 <u>に</u> 本をあげる。		
壁 <u>に</u> ポスターを貼る。		
京都 <u>に</u> ある。		場所、時間

机の上 <u>に</u> 本がある。	原因
9時 <u>に</u> 始まる。	
地震 <u>に</u> 驚く	
雨 <u>に</u> 濡れる	
元氣 <u>に</u> 働く	

山口(1980)は、「に」の最も基本的な意味は「場面性」にあるとしている。漠然とし過ぎる嫌いが無いわけではないが、確かに、ことがらの成立する時間、場所は、述語の意味によって到達点、目標ともなり、また原因ともなり、「に」の用法にはそうした幅の広さがある。むしろ問題となるのは、こうした幅広い用法を持つ「に」のどれを助詞とするか助動詞とするかだろう。様々な区分がされているが、「10分後に来て下さい。」と「すぐに来て下さい。」の「に」に本質的な差は認めがたい。松下は、「乗る、貸す、居る」等の必ず何かに依拠して行われる動作を表す動詞が取る「に」だけを静助辞(いわゆる助詞)とする。そして、「息子を医者にする」に見られる「する、なる」等の一致性の動詞、もしくは一致性を帯びた動詞(たとえば、「嫁に行く」「売りに行く」「刺身に切る」)が取る「に」は断定の助動詞(叙述性のある助詞の意味で、いわゆる助動詞)として、助動詞の用法を広く捕らえる。山口(1980)は、「に」が格助詞としての関係表示機能を句と句の関係に広げ、指定の助動詞性を帯びたと考える。さらに、日下部(1968)は、現行の文法論の中では大胆な説とも言えるが、「に」と「で」はむしろ「だ」の変化形とし、格助詞相当の機能もそこに認める。しかし、このように考えた方が、後にみるように「のに」や「だけに」の意味を明確にする。たとえば、「食べるのに箸がいる。」と「食べるのに太らない。」という二文を、片方は助詞の「に」で目的を表すとし、片方は「のに」という逆接の接続助詞とするのでは言葉が構造的に捕らえられない。「電話を受けながらメモする。」と「電話を受けながら人に伝えない。」が順接と逆接という別の意味に解釈されるからといって、「ながら」の品詞を別に立てることはしないし、「食べるために箸が要る。」と「食べるために太る。」にも同じことが言える。ここで問題にしている「のに」についても、語の形の同一性から、基本的な意味は共通しており、前後の文の意味と構文条件によって異なる用法を示すと考えるのが妥当と思われる。ただ、「食べるのに箸が要る。」の場合は、確かに格成分として助詞的性格が強く、「食べるのに太らない。」の場合は叙述性が感じられる。この違いがどこからもたらされるかは明らかにしておく必要がある。これについては次節で検討する。

3節と4節で、「で」と「に」は共に「だ」の連用形と考へ得ることを示した。「で」と「に」とで異なるところは、「で」は動詞の中止形と同様、叙述が途中で止まり完結していないことを表すので、前件はことからの発端、きっかけを意味する。一方、「に」の場合は、後件のことから、動作の成立する「場面」を示す意味合いが大きい。次の例文で、b文はいずれも前件が副詞句のように後件に係っているが、a文では前件と後件の関わり方が異なるのが感じられる。

- (11) a 人を増やすだけで、いい仕事ができる。
 b 人を増やすだけ、いい仕事ができる。
 (12) a こういう人は練習するだけに、上手になる。
 b こういう人は練習するだけ、上手になる。

次に「の」と「だけ」という名詞相当語の意味と機能について考えてみたい。

5. 「の」「だけ」の意味と機能

「の」には様々な用法がある。「私の本」のように連体修飾語を作ったり「戦争のない世界」のように主格を表したりする「の」は助詞と定めて問題がない。さらに、「の」は、次のように「もの」「ひと」「ところ」など、形式名詞とよばれるものと置き換えられる。

私はきのう学校で花子に本を渡した。

私がきのう学校で花子に渡したのは、本だ。(もの)

私がきのう学校で本を渡したのは、花子(に)だ。(ひと)

私がきのう花子に本を渡したのは、学校(で)だ。(ところ)

私が学校で花子に本を渡したのは、きのうだ。(とき)

私がきのう学校で花子に本を渡したのは、無茶だった。(さま)

そこで「の」は、こうした名詞の意味が抽象化されたものと考えられる。ここで問題となるのは、こうした準体助詞と呼ばれる「の」と、いわゆる「のだ」の「の」とを区別するののかしないのか、もし区別するならその基準は何かということだろう。

- (13) 私が持っているので、間に合わせよう。
 (14) 私が持っているので、心配しなくていい。

を挙げることができる。

「だけ」は、もともとは名詞「丈」が語源と言われる⁽⁶⁾ように、前に来る名詞を限定する働きがある。と同時に、「だけ」が接続することによって句全体を名詞化する形式名詞の働きも持っている。「こと」「ひと」「もの」がさらに抽象化した「はず」「よう」「そう」等と同類と考える。ここでは「だけに」しか取り上げないが、城田(1987)には「だけ」自体、名詞から副詞までの用法を持つことが示されている。

「あなたの」は「の」の接続によってその全体が名詞として一つの意味を持ち得るが、「あなただけ」は「あなた」を限定することで、指し示しているものが「あなた」であることは変わらず、ただ新たに限定の意味が加わる。述語文が接続する場合も、「あなたが持っているのは「の」の接続によって全体が名詞化するのに対して、「あなたが持っているだけ」は「だけ」の接続によって、「あなたが持っている」の部分が名詞化し、そこにさらに限定の意味が加わっているように感じられる。

結局「の」も「だけ」も叙述を名詞化するが、「だけ」は叙述の名詞化と同時に、その叙述される部分のコトガラを限定するという意義を持つ。それに対して、「の」は、叙述の名詞化を行うだけで、新たな意義は追加しない。

6. 「ので」と「だけで」の意味と構文的条件

3節で「で」、5節で「の」「だけ」の意味と機能について考えたが、これらが結合した「ので」「だけで」の意味と機能も、基本的にはそれぞれの語の意味と機能を引き継いでいる。そこで、「ので」の「で」の性格には、助詞的なものから助動詞的なものまでの幅がみられる。例文(13)、(14)のように、文の意味でしか区別できない場合もあるが、一般には、助詞の「で」が用いられているときには、前件が後件の格成分になっており、一方、助動詞の「で」が用いられているときには、前件に主語や陳述副詞が来る。すなわち、前件が文として自立している。

「だけで」の「で」が助詞的か助動詞的かは、名詞が「だけに」接続する場合を除いて、「ので」以上に判然としない。この点が、後にみる「のに」「だけに」と違うところである。これは、「で」格と述語との結び付きが、「を」格「に」格に比べてずっと弱いからだろう。名詞の場合には、「もの書きだけでグループを作る。」と「もの書きなだけで大変な収入だ。」の例のように、前件の叙述性が明らかだ。

「ので」と「だけで」は理由に使われることもある。理由表現としては、従来「から」「ので」がよく取り上げられているので、「から」を含めて考えてみたい。まず、「から」の品詞と意味について定めておこう。

「友だちが北海道から来た。」という場合の「から」は、起点を表す。理由の「から」を接続助詞に分類する人も多いが、「から」が格助詞か接続助詞かは、二次的なことというより、もともとは同じものであろう。石垣(1955)による通時的考察もあり、また、現代語に限って考えても、次のような文の違いは「から」自身にあるとは考えにくい。

(15) 彼がこう言ってからこうなった。

(16) 彼がこう言ったからこうなった。

この二文の違いは、「から」にあるのではなく、「から」の前に来るアスペクトにあると考える。このように考えると、いわゆる理由の文の「から」も、その前件を後件の事態の起点として統一的に捕らえることができる。そこで、次の(17)のような唯一の理由、条件を示す論理文には「から」しか使えない。また、命令文や誘いかけの文に「から」が用いられるのも、命令したり誘いかけるときにはその根拠が一つでなければ勢いに欠けるからだろう。

(17) $3^2=9$, $(-3)^2=9$ であるから, 9の平方根は3と-3の二つである⁽⁹⁾。

(18) うるさいから, 静かにしなさい。

(19) 天気がいいから, 散歩しましょう。

理由の「から」の前には、「好きだから」と用言の終止形(叙述形)がくる。このことは、「から」の前にすでに話し手の主観が表されていることを示す。このため「ので」にない言いきりの形が「から」にあることは、すでに多くの人が指摘している。

一方、「ので」では、前件のことがらを話し手が一步退いて提示している。

(20)a 朝早く起きて, ご飯を食べた。

b 朝早く起きたので, ご飯を食べた。

a文は単に二文を接続したもののだが、b文は、前件を「の」で受けて名詞化している。すなわち、前件で述べられていることがらが客観性を帯びて既成の事実として示されていることになる。寺村(1984)は、「『PハQノダ』という文型は、基本的には

典型的な題述文『XハYダ』という文型と同じものだ』と言えるとして、「先行する文、あるいは状況をPとして取り立て（言語化するかしらないかは別として）それについて説明する（あるいは説明を求める）のが、～ノダの最も一般的な使い方である。」と述べている。また、大津（1993）は、英語の分析を通して、日本語で「のだ」を使うのは、文を静的にし、事象を確認し、観念化するためと捕らえる。「ので」全体としては、前件の客観性のある事態に引き続いて後件の事態が生じることを表しているのので、いわば、「こういう状況で」という意味を持つ。松村（1944）にはすでに、「『ので』は或事実の断定を受けて、それによって下の事実が生ずることを表す」との指摘がある。

「だけで」は、P文のことがらを限定する。他に多くの可能性があるかもしれないが、ここでは一応他のことは何も無い、しないと限定している。(21)、(22)文とも「だけで」は、前件を限定している点が「ので」と異なる。

(21) 昔から親しくつきあっている $\left\{ \begin{array}{l} \text{ので} \\ \text{だけで,} \end{array} \right\}$ 出入りが許された。

(22) 弁償する $\left\{ \begin{array}{l} \text{から,} \\ \text{ので,} \\ \text{ことで,} \\ \text{だけで,} \end{array} \right\}$ 勘弁して下さい。

前件、後件のつながりが只一つの関係で成り立っているとき、それは、因果関係の時が多いが、他の要素の存在が前提にないため、「だけで」は使いにくい。

(23) 雨が降っている $\left\{ \begin{array}{l} \text{ので,} \\ \text{*だけで,} \\ \text{だけで,} \end{array} \right\}$ $\left\{ \begin{array}{l} \text{道が濡れている。} \\ \text{道が濡れている。} \\ \text{売り上げが落ちる。} \end{array} \right.$

逆に、前件と後件が継続関係になく、対比的背反的な意味を持つときは、「ので」は使いにくいようだ。

(24) 見る $\left\{ \begin{array}{l} \text{*ので,} \\ \text{だけで} \end{array} \right\}$ 取ってはいけない。

(25)a 旅行するので、まとまった金が必要だ。

*旅行するので、まとまった金が必要か。

b 旅行するだけで、まとまった金が必要だ。

旅行するだけで、まとまった金が必要か。

「の」「だけ」とも連体形かつ概念形に接続するので、話者の主観は「ので」「だけで」節には含まれない。しかし、「ので」節には文としての自立性があるが、「だけで」節には少ないように感じられる。それは、「ので」節の述部は丁寧体に変更可能だが、「だけで」節ではしにくいことにも表れている。「の」に名詞としての実質的意義がなく、名詞化するのがその役目なのに対して、「だけ」は名詞としての実質的な意義を持つためだろう。しかし、「ので」「だけに」とも後件には命令や誘いかけの文が来にくい点が「から」とは異なる。

7. 「のに」と「だけに」の意味と構文的条件

「に」は目的から原因まで様々な意味を持つが、それに「の」「だけ」が結合した語にも同様に意味の多様性が認められる。動詞に接続する「のに」の用法は、大きく次の二つに分けられる。

(26)a 車は 赤いのに 決めた。

b 信号が赤いのに 止まらない。

(27)a 彼は 歩くのに 杖を使う。

b 彼は 歩くのに 僕は車に乗る。

従来、aの用法は目的、bの用法は逆接と呼ばれる。そして、品詞の解釈としては目的の場合には、「に」を格助詞と考え、逆接の場合には、準体助詞の「の」に助詞の「に」が接続したと考えるか（松下（1930））、接続助詞として一語と取るか（橋本（1959）⁽¹⁰⁾、三尾（1942）。ただし、「歯の痛いのに困った」は助詞＋助詞とする。）、あるいは、「のだ」の連用形と考える（三上（1953））。しかし、ここでは、「のに」も「ので」と同じように二語から成ると考え、その「に」には格助詞としての性格の強いものから助動詞的な性格の強いものまでであると考え。「見るのに金が必要だ。」と「見るのに見えない。」の意味の違いは、文脈によって生まれるとみる。その文脈とは、具体的には、前後の文の意味と「の」が受ける前件の述部のアスペクトによって決まる。すなわち、目的の「のに」の場合は、前件は動作文になる（例文（28））。また、後件

には例文 (29) のように「必要だ」「いい」といった意味の語が来ることが多い。

(28) 電車に乗るのに切符を買った。

(29) この方が持って歩くのに便利だ。

このことは、後件に「必要だ」「いい」といった意味の語が来るから、前件が「目的」の意味に取れると言った方がむしろ正しいだろう。その点で、「のに」という語自体には目的の意味は希薄で、基本的には「～際に」といった意味合いしかない。森田(1985)^[11]には、外国人の誤用例として「いい成績を取めるのに努力しなければならない。」という文が挙げられている。「いい成績を取めるのに努力が必要だ。」という表現は可能で、一方、「いい成績を取めるために努力しなければならない。」という文が可能なことからも、「のに」の目的の意味は弱いことがわかる^[12]。

前件の述部が状態を表す場合には、次の例のように、「のに」の意味は二義的になる。

(30) この注射は痛いのに効く。

そして、逆接の場合には、前件、後件に対比的な要素が必要だ。そのため、逆接の前件と後件には、対象化が可能な現在の状況のみで、後件に話し手の意向や命令は来ない。

逆接	目的
忙しい <u>のに</u> 行づらい。	歩く <u>のに</u> 杖を使うづらい。
行かなければならない。	使わなければならない。
行きたい。	使いたい。
*行こう。	使おう。
*行け。	使え。
*行った方がいい。	使った方がいい。
*行ってくれ。	使ってくれ。
行くか。	使うか。

また、「目的」の場合は前件には動詞の言い切り形現在しか来ないが、「逆接」の場合は、タ形、テイル形、さらに、ラシイ、ヨウダ、ソウダ等のムード表現が可能だ。

次に「だけ」についてみると、これも「のに」と同様、用法に幅があるが、基本的には次の二つが代表的なものだろう。

(31) あなただけに教えましょう。

(32) 緑の保全が叫ばれているときだけに、活発な意見が交わされた。

しかし、ここでも格助詞的な「に」か、助動詞的な「に」かは基本的に文脈によると言える。たとえば、次の文は二義的である。

(33) 旅行するだけに、莫大な金がかかる。

「旅行以外のことではなく、旅行することのみに」とも取れるし、「旅行するから」の意味にも取れる。次の文はどうだろうか。

(34) 肉体的精神的に弱い人の場合、たとえ離婚しても生活苦など他の苦勞が増すだけに…

ここまででは、「だけに」の「に」が格助詞として機能するか否かはわからない。次に来る文によって決まる。「苦勞が増すだけに、よく考えた方がいい」とも言えるが、この実例は「終わりがねない」と続く。(日経 92.9.18.) 一般的に、助詞的な「だけに」は、動詞との結び付きが強く、目的語としての役割を持って、ほかではなくその目的語を限定する。一方、副詞的な「だけに」は、後件の成立条件を、一つの場面に限定することによって取り立てる。そこで理由の意味に近くなる。副詞的な理由の「だけに」の場合、前件は状態性の表現の場合が多いようだ。動詞の場合は、「だけに」に接続するのは、「ている」形が実際の用例には多い。動詞が言い切りの形で接続するのは、「ある」「持つ」「要る」「わかる」や、自動詞的な状況表現、また、「必要とする、経験がある、課題となる」等のように、動詞が実質的な意味を持たない状態性の表現が多い。また、形容詞の場合には、「だけに」に接続するのは、「高い、多い、少ない、」等の客観的な属性形容詞が多く、「うれしい、はずかしい」等の感情形容詞や「ほしい」「～たい」等の願望表現は、現在形では「ので」に比べて現れにくい。しかし、動作性の動詞や感情形容詞が「だけに」の前に来ないというわけではない。

(35) 高く飛ぶだけに、安全面への配慮が必要だ。

(36) うれしいだけに、言葉も弾む。

ただこうして動作動詞が「だけに」の前に来る場合も、それは動作ではなく、ものの

性質を表している。このことは、名詞の場合に端的に表れる。

(37) 相手が子供だけに 配慮が必要だ。

この場合の「子供」は、「子供だけにあげる。」の「子供」とは違って、子供の性格付けがなされている。つまり、「だけに」の前では、ものの本性、属性が「これだけ」と限定されていると言える。後件については、格助詞的な「だけに」の場合には構文的な制限はなく、命令文も可能だが、副詞的な「だけに」の場合には判断文、現象文が普通で、命令文は来にくい。

(38) a ? 熱があるだけに 外出はやめなさい。

b 熱があるだけに 外出はやめた方がよい。

c 熱があるので 外出はやめなさい。

いくつかある「だけに」の解釈の中では寺村（1991）の説明が最も説得力がある。寺村は、「だけに」について、「この型の文の言いたいことの重点は、『YについてQ』⁽¹³⁾というところにあるのだが、そのことについて聞き手の共感を得るために、『XがP』という聞き手にとって既知の事実を持ってき、『XがPなら、YがQなのは当然だ』と論理的な筋道で聞き手を納得させようとするものである。その「論理」というのは、つまり社会的な常識ということである。」と述べている。ただ、前件は必ずしも既知のことがらである必要はない。寺村氏も述べておられるように社会的な常識で納得できることであればよい。この文型がことらの本性を取り立てているのが、話し手、聞き手に無意識の内にも了解されているので、たとえ前件の内容が既知のことがらでなくても自明のことがらとして提示される。提示の仕方に主観が入っていない分、話し手の主張の正当性を高める効果を持つと言えよう。

8. おわりに

本稿では、理由表現とされる「ので」や「だけに」、また、目的と逆接に区別される「のに」を、語の用いられ方ではなく、まず語の形に基づいて分析した。その結果、語構成の上からは、「ので」と「だけで」、「のに」と「だけに」それぞれのペアに共通するところがあり、一方、いわゆる形式名詞の持つ名詞の性格という点では、「ので」と「のに」、「だけで」と「だけに」が共通することをみた。名詞が共通するということは、さらにその名詞に接続する述部の叙述性にも共通性があることを意味する。そこ

で最後にそれぞれの語がどんな陳述表現を取るかを見てみよう。「のに」や「だけに」には明らかな用法の違いがあるが、ここではそうした個別の用法は考慮せず、接続が可能な場合があるか否かで検討する。ただし、基本的には助動詞的性格の「に」の場合に、陳述表現が現れる。比較のために「から」も加えた。

従属節に現れる陳述表現

	から	ので／のに	だけで／だけに
だろう	○	×	×
まい	○	×	×
ようだ (推量)	○	○	×
らしい (推量)	○	○	×
そうだ (伝聞)	○	○	×
つもりだ	○	○	?
予定だ	○	○	○
そうだ (予想)	○	○	○
という	○	○	○

この表で、「から」しか「だろう」「まい」と共起しえないのは、その接続の形から自明のことだ。このことは同時に、それぞれの語に接続する前件の述部の主観性という点で、「ので」「だけに」と明確な違いを示している。次に、「ので」と「だけに」の異なるところは、「ので」が推量の「ようだ」以下すべての陳述表現と共起し、一方、「だけに」は、話し手の意志を表すものとは共起しない点にある。すなわち、「限定」できるのはあくまで人が客観的に判断できることがらである。伝聞の「そうだ」は、一見、人の言葉をそのまま伝える完全に客観的な描写表現のように思えるが、日本語の「そうだ」は当の発話者が目の前にいても使われるという点で、たとえば印欧語の伝聞表現とは本質的に異なったところがある。伝聞というよりその使われ方は「婉曲」に近く、ムード性が高い⁽¹⁴⁾。このため、「だけに」が「そうだ」に接続できないと考える。

一方、後件にはどういった陳述表現が現れるだろうか。理由の「から」「ので」の係り先については山口 (1982) の考察がある。理由の「だけに」は「ので」とほぼ同じ条

件と言える。これは、「から」では前後に陳述表現が現れるところから前件後件が文として呼応しているのに対して、「ので」「だけに」では前件に叙述性が無い分、後件の叙述性が文全体を支配しているということになる。ただ、「から」「ので」の場合はそこで文を言い終わることもできるが、「だけに」はできない点、また、「から」「ので」の前の述部は丁寧体になり得るのに「だけに」はなりにくい点から、理由表現に限って言えば、から>ので>だけに の順で、陳述度が低くなる。

以上見てきたように、語というものがはじめからある品詞を担っていると考えるのではなく、同一語形のものももとは同じ意味を持ち、文の中での用いられ方によって便宜的にある品詞に分類される、すなわち、異なる機能を担うと考えることによって、より体系的で整合性のある文法解釈が可能になると思われる。

注

1. 本稿は、三枝令子『「だけに」の分析』言語文化 27 卷 (1990) 一橋大学語学研究室 を下敷にしている。ただ、前稿は、「から」「ので」の扱いが表面的だったため、「だけに」との比較が構文レベルにとどまっていた。その点で、前稿の内容に大幅な加筆訂正を行った。
2. 松村明編「日本文法大辞典」明治書院。
3. 国立国語研究所 (1989) 『談話の研究と教育 II』日本語教育指導参考書 15 57 頁。森田・松木 (1989) 『日本語表現文型』アルク 101 頁。
4. 助詞を語形の同一性を尊重して分類したものに日下部 (1968) がある。本稿の基本的な考えは、この論文の語の捕らえ方に負うところが大きい。
5. 時枝 (1950) 187~188 頁。
6. 言い切り形の叙述形と概念形については、三枝 (1993) 「動詞・形容詞の名詞的ふるまい」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究—12』情報処理振興事業協会技術センターに述べた。
7. 日下部文夫 (1961) 「アクセントの現象二三」『言語生活』筑摩書房。
8. 松村明編「日本文法大辞典」明治書院 427 頁。
9. この例文は、岩井智子 (1988) 『「から」と「ので」意味と用法及びその指導法』昭和 62 年度日本語教育研修会実習課程報告書 (日本語教育学会) からとった。前後の文に論理的な関係がある時には「から」を使うという指摘は、筆者は寡聞にして他に知らない。
10. 橋本進吉 (1959) 『国文法体系論』岩波書店。
11. 森田良行 (1985) 『誤用文の分析と研究—日本語学への提言』明治書院。
12. 国広哲弥 (1992) 「「のだ」から「のに」・「ので」へ—「の」の共通性」『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会には、この誤用文について、筆者とはまた別の観点から解釈がなされている。

13. 原文 (172 頁) には「Y について P」とあるが、誤植と思われる。
 14. 三枝令子 (1989) 「続・日本語ワンポイントレッスン」『月刊言語』18 巻 4 号

参考文献

- 山田孝雄 1922『日本口語法講義』宝文館
 松下大三郎 1930『標準日本口語法』中文館書店 復刊(増補校訂)勉誠社 1977
 三尾砂 1942『話言葉の文法』帝国教育会出版部 改訂版『話しことばの文法』法政大学出版局 1958
 松村明 1944「助詞の異同について」『日本語』三月号
 時枝誠記 1950『日本文法口語篇』岩波書店
 永野賢 1951「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』
 三上章 1953『現代語法序説』くろしお出版
 石垣謙二 1955『助詞の歴史的研究』岩波書店
 日野資純 1963「いわゆる接続助詞『ので』の語構成—それを二語に分ける説を中心として—」『国語学』52 集
 日下部文夫 1968「現代日本語における助詞分類の基準—助詞の相関—」『言語研究』53 号
 氏家洋子 1969「文論的考察による統統助詞『の』の設定」『国文学研究』41 集
 原口裕 1971「『ノデ』の定着」静岡女子大学研究紀要 5 号
 吉井量人 1977「近代東京語因果関係表現の通時的考察—「から」と「ので」を中心として—」『国語学』百十集
 山口堯二 1980『古代接続法の研究』明治書院
 寺村秀夫 1981『日本語の文法 下』日本語教育指導参考書 5 国立国語研究所
 1984『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
 1991『日本語のシンタクスと意味III』くろしお出版
 山口佳也 1982「『～から』と『ので』のかかり先について」『国文学研究』77 集
 城田俊 1987「副助詞について」『国語国文』56 巻 3 号
 大津栄一郎 1993『英語の感覚(上)』岩波書店